

[研究ノート]

エルトン・メイヨーとピエール・ジャネ

——精神病理学と社会的研究——

高 木 直 人

名古屋学院大学商学部

要 旨

経営学は、学際的な研究であると一般的に言われている。その理由には、哲学、心理学、社会学など多岐にわたる分野が用いているからである。メイヨーも、学際的な研究者¹⁾である。メイヨーは、経営学分野での初期人間関係論の祖とされているが、彼の出版した著書には、経営学というタイトルでの作品は存在しない。最も有名であるメイヨーの3部作である『The Human Problems of an Industrial civilization (産業文明の人間問題)』²⁾『The Social Problems of an Industrial civilization (産業文明の社会問題)』³⁾『The Political Problems of an Industrial Civilization (産業文明の政治問題)』⁴⁾は、すべてのタイトルに経営学と言った文字は存在しない。その著書では、社会環境変化と「人」の関係について関心を持っていたことには間違いないと思われる。その中でも、メイヨーが関心を持っていた研究分野が心理学であり、彼は、ジャネの心理学を研究し、初期人間関係論に利用している。本稿においては、メイヨーが最後に出版した著書である『Some Notes on the Psychology of Pierre Janet (ピエール・ジャネの心理学に関する研究ノート)』⁵⁾にはどのような内容がまとめているのかを整理してみた。

キーワード：精神衛生学，精神病理学，ヒステリー，臨床的面接

Elton Mayo and Pierre Janet

——Psychopathology and Social Study——

Naohito TAKAGI

Faculty of Commerce
Nagoya Gakuin University

1. 序

『Some Notes on the Psychology of Pierre Janet(ピエール・ジャネの心理学に関する研究ノート)』の序にあたる部分で、メイヨーは、以下の内容を述べている。

「この著書は、ジャネの業績に関する研究ノートである。決して、ジャネが長年研究を行ってきた臨床的研究を報告したものではない。ジャネの業績がすべてフランス語で書かれている。今後、ジャネの業績をフランス語の原点で読もうと考えている者にも、英語で書かれたこの著書をガイダンス的に利用してくれることを意図して作成した。また、医学生や精神医学の問題に関心のある学生のために、さらには、同僚の研究者のために作成した。特に、特定の状況の研究において、ジャネの考え方が最も有益であると考えている。」⁶⁾とメイヨーは述べている。

この著書は、メイヨーが、ジャネの業績を理解するための英語版の著書として作成している。それは、メイヨー自身がジャネの心理学に関して、高度な理解ができていたことを証明することになる。すなわち、メイヨーは、心理学の専門家として通用する知識量の多さと、ジャネの心理学に関して理解ができていたと言える。

本稿では、『Some Notes on the Psychology of Pierre Janet』について、筆者が重要と考える部分を整理する。

その前に、次節では、職場で近年問題になっている、「こころの病」について少し整理する。なぜなら、メイヨーは、アメリカにおける産業調査⁷⁾において、最も職場環境によって労働者に発生する「こころの病」⁸⁾に関心を持っていたと考えるからである。

2. こころの病

近年、ストレスやメンタルヘルスということばを耳にするようになった。すなわち、「こころの病」は企業においても話題となっている。だからこそ、メンタルヘルスマネジメント検定などが実施されだした。その理由は、現代企業も「こころの病」に苦しむ労働者が増えたからである。

しかし、「こころの病」については、現在も、企業内の同僚などに、このような状態が発生したとしても理解できているかと言えば、まだまだであると言わなければならない。また、「こころの病」には色々な種類が存在し、その病に対する治療方法も異なっており、この病に関しては複雑な問題を含んでいるのが現状である。

厚生労働省の「知ることからはじめよう みんなのメンタルヘルス」の総合サイト⁹⁾では、以下の内容が紹介されている。

そこでは、「こころの病」は誰でもかかるとの説明があり、「こころの病」に関しての正しい理解が必要との説明がなされている。また、平成20年のデータであるが、「こころの病」で病院に通院や入院をしている人たちは、国内で323万人にのぼると説明している。それは、日本人のおよそ40人に1人の割合である。さらに、生涯を通じて5人に1人が「こころの病」にかかるとも説明している。最後に、「こころの病」は特別な人がかかるものではなく、誰でもかかる可能性

のある病気だとくくっている。

なお、「こころの病」に関しては、多くの場合は治療により回復し、社会の中で安定した生活をおくることができるようになる。そして、「こころの病」になった場合は、体の病気と同じように治療を受けることが何よりも大切であるが、ただし、早く治そうと焦って無理をすると、回復が遅れることがあり、焦らず、じっくりと治すという気持ちで臨むことが回復への近道と説明している。最後に、「こころの病」は回復しうる病気であるとも説明している。

「こころの病」は、他人からはわからないものである。いくら本人が苦しんでいても、職場の労働者にもわかりにくいという特徴がある。私たちは、日常生活において、「こころの病」とわかる人に対して、無理はさせない。しかし、「こころの病」のほとんどの場合、気づかない。だから、「こころの病」に苦しんでいる本人に無理なことをさ、病を悪化させているかもしれない。「こころの病」は、少しでも同じ職場の労働者が、「その病」を正しく理解することによって、さらなる悪化を予防できるかもしれない。企業においては、特に、「こころの病」に関しての正しい理解をする人が少しでも多い方がいい。

メイヨーは、この「こころの病」に関しての治療が必要であることを、彼の過去のアメリカにおける産業調査などからも理解できる。やはり、メイヨーは、「こころの病」を持った労働者に対する治療に、ジャネの心理学が最も有効であると考えていた。そのような経緯からも、ジャネの心理学を他の人にも知ってもらいたいことから、『Some Notes on the Psychology of Pierre Janet』を、ガイダンス本として作成したのであろう。

3. ジャネの心理学を理解するために

ジャネの心理学を理解するためのガイダンス本として、メイヨーが作成した『Some Notes on the Psychology of Pierre Janet』を、本来であれば細部にわたり整理することが重要であろう。しかし、細部にわたる整理は、今後の課題とさせていただきたい。

さて、この著書は第1章に「Psychopathology and Social Study (精神病理学と社会的研究)」¹⁰⁾、第2章に「Hysteria And Hypnosis (ヒステリーと催眠)」¹¹⁾、第3章に「The Complexity Of The Attentive Act (意識的な行為の複雑性)」¹²⁾、第4章に「Obsessive Thinking (強迫的思考)」¹³⁾、第5章に「Obsession And The Equilibrium Hypothesis(強迫症と均衡仮説)」¹⁴⁾、第6章に「The Psychology Of Adaptation (適応の心理学)」¹⁵⁾の項目で構成されている。

各章のタイトルからもうかがえると思うが、心理学の用語である、「精神病理学」「ヒステリー」「強迫的思考」「強迫症」などが各章のタイトルに使用されている。まず、第1章にはどのような内容が書かれているのかを簡単に整理¹⁶⁾し、その他の章に関しては今後の課題としたい。ただし、筆者が重要と感じる部分をまとめている程度であることを理解していただきたい。

4. Psychopathology and Social Study

第1章の「Psychopathology and Social Study」では、前半の部分では、精神衛生学について述べられている。それも、精神衛生学では、「ヒステリー」「強迫症」「精神分裂病」「変質病」などが、人々にとってどのように理解され感じているのかを説明している。さらに、精神衛生学を研究するには、「観察」と「臨床」の重要性と、その意味に関して書かれている。

また、特に臨床が重要であるとの考えから、「医学上の研究は、明らかにそして明確に、学生は実験室の外に出て、病院の臨床に行くようにして自分の方法と方法に関する概念化を変更させるように教育している唯一の教育形態である。実験室においては、単純な理論が必要なのである。それ故に臨床家は、辛抱強い観察、見事に飛躍した推論に対する懐疑、そして予期しない進展に対する慎重な警戒に向けて訓練されている。」¹⁷⁾とも述べている。

しかし、メイヨーがこの第1章で最も述べたかったことは以下であろう。

メイヨーは、「この本は、まさしく最初の段階である。また、内容に関しても困難を避けるために、最小限度にまとめることとする。そのために、精神病理学に限定する。また、精神心理学については、フロイトの考えを利用している。ただし、私は、フロイトのように広範囲を対象としていない。ほとんどの部分において、私は、強迫的思考の問題を考察している。これに関する私の正当化は、現代の精神病理学がその最も確実なそして最も徹底的な貢献をしているのがこの領域においてである。」¹⁸⁾と述べている。

さらに、「強迫的思考は、折にふれてあなた方のみならず私をも悩ませている正常の状態から不可避的な変形なのである。もちろん私は、ジャネやそのほかの人の業績にも細心の注意を払う必要がある。」¹⁹⁾とし、「ジャネがヒステリーの研究を出発点とし、強迫状況を観察することによって、それらがヒステリー症の発作から明確に区別する方向へと導かれている」²⁰⁾と述べている。

その後の本文では、メイヨーが過去に経験した、人との付き合いについての内容が書かれている。特に、メイヨーが、オーストラリア大学によって指定された大学側の協同委員会のメンバーの一人として選出され、労働組合会合において、大学側でない六人と知り合いになり、その六人との関係について述べている。ここで、注目すべきは以下のことであろう。

本文に、このような一文があった。それは、「グループのメンバーの一人が、人間の適応に関する研究の私の協同者である医学の同僚に診察してもらった。」²¹⁾とのことである。

そしてその人物は、しばらくの間、医学的治療を受けて、自分自身の個人的な過去の出来事などを話すようになっている。

その結果、「自分の医学上のアドバイザーに愛着を感じ、そして指導のもとで、他人と普通の友人関係を持つ能力を身につけることとなった。そして、彼は素晴らしい回復をみせた。」²²⁾と述べている。

メイヨーは、この回復した最も重要なポイントとして、個人的来歴の持つ可能性に、意味があると感じるのである。

メイヨーはこの章を終える前に述べておく必要があるとして、「臨床心理学の立場からは、あ

る人が語るすべてのことばは、その脈絡の中の項目としてみなければならぬのである。その脈絡というのは、その個人の個人的来歴と現在の社会状況である。これは、漠然と人文科学を巡って取り巻いているそれら大学の研究科目の解説者によって教えられているほとんどすべてのものに直接反対するものであるように思われるであろう。そして、実際にそうである。なぜならば、如何なる主張も書物も足場にとってきて、それを論理的関連や適切さでもって試すといった大学の方法は、おそらく知的訓練には素晴らしいものであるが、理性的な実践にとつては非常に困ったものである。しかし、そのような指導が教室から消えるべきであるなどと言っているのではない。それに従う学生が、思考の統制において何かを得、正確な陳述をする能力において何かを得ていることは固く保証する。しかし、理解しようとし、そして自分の仲間と満足の行く生活しようとしている彼は、教科書の中でどうあるべきか書いているところからではなく、自分が実際に思考していることから始めなければならぬのである。」²³⁾と結んでいる。

その後の文書として、メイヨーは、臨床心理学者とは、「面接において語られたことに関する真偽（あるいは他の価値観）を完全に無視し、そして、そのような発言をしている人の状況においてそのすべての陳述が持つ意味を探し求めなければならない。」²⁴⁾と述べている。

さらに、メイヨーは、臨床的面接を行う場合に求められる単純なルールとして6項目²⁵⁾を示している。

その内容は、「①全体的注意を面接されている人に向けること。そして、面接されている人にそのことがわかるようにしなさい。」「②話をするのではなく、聞きなさい」「③議論や忠告をしてはいけない」「④a. 彼が言いたいこと、b. 彼が言いたくないこと、c. 助けなしでは彼が言うことのできないことを、聞きなさい。」「⑤あなたが聞いたままに、試験的に、そしてその後修正のために、あなたの前に提示されたパターンを構築してみせなさい。このテストをするために、時折、言われたことを要約し、コメントするためにそれを提示しなさい。常にこのことを注意深く行いなさい。すなわち、簡約しそして明白にするのであって、ことばをつけたことや、あるいは、そのことばをねじ曲げてはいけない。」「⑥言われたことはすべて、個人的な秘密として考えるべきであり、他の人に漏らしてはいけないことを覚えておくことである。（状況によっては、専門家による議論を妨げるのではなく、個人的な秘密が外部に漏れない措置が取られた場合は、何らかの形で報告することには妨げるものではない。）」であった。

この単純ルールこそが、臨床的面接を実施してきたメイヨーが最も重要にしていたことであろう。

この章の最後に、メイヨーは、「単純なルールの必要性は、ジャネの臨床的発見に関する十分に細部にわたる研究にわれわれがいくつかの時間を割いて後に、明確になっていくであろう。」²⁶⁾と締めている。

5. 結び

メイヨーが作成した『Some Notes on the Psychology of Pierre Janet』の第1章を簡単であるが整理した。この章を少し整理しただけでも、メイヨーの心理学に関する知識の高さを再確認する

ことができた。

すなわち、メイヨーは、労働者が抱える「こころの病」に関心を持って、実際にその問題に対する解決策にジャンエの心理学を応用していたことであろう。メイヨーの業績から、彼が経営学者よりも、精神病理学者や社会学者として有名であるとしても、その理由が理解できる。このことから、メイヨーが学際的な研究者であることに間違いはない。

謝辞

この原稿を作成するに、多くの方々にご協力を頂きましたことに御礼申し上げます。また、この原稿は、2015年度名古屋学院大学研究奨励金の成果の一部で作成することができました。

註

- 1) メイヨーの哲学、心理学、社会学に関する知識の高さについては、以下に述べているので参考にして欲しい。
高木直人著「メイヨーの生涯と業績（その1）」『呉大学短期大学部紀要』第9号、2005年。
高木直人著「メイヨーの生涯と業績（その2）」『呉大学短期大学部紀要』第10号、2007年。
その他の参考資料として以下を参照されることを進める。
稲村毅著「詳伝エルトン・メイヨー（1）」『大阪市立大学経営学研究会 経営研究 第40巻 第2号』有斐閣、1989年7月。
稲村毅著「詳伝エルトン・メイヨー（2）」『大阪市立大学経営学研究会 経営研究 第40巻 第4号』有斐閣、1989年11月。
- 2) メイヨーの著書である『産業文明における人間問題』は、翻訳されて出版されている。
Mayo, G. E., “*The Human Problems of an Industrial civilization*”, New York, The Macmillan & Co., 1933.
翻訳として以下がある。
村本栄一訳『新訳産業文明における人間問題』日本能率協会、1967年。
- 3) メイヨーの著書である『産業文明の社会問題』は、翻訳されて出版されている。
Mayo, G. E., “*The Social Problems of an Industrial civilization*”, Boston, Harvard Business School, 1945.
翻訳として以下がある。
藤田敬三・名和統一訳『アメリカ文明と労働者』大阪商科大学経済研究会、有斐閣、1951年。
- 4) メイヨーの著書である『産業文明における政治問題』は、翻訳されていない。
Mayo, G. E., “*The Political Problems of an Industrial Civilization*”, Boston, Harvard Business School, 1947.
- 5) メイヨーの著書である『ピエール・ジャンエの心理学に関する研究ノート』は、翻訳されていない。
Mayo, G. E., “*Some Notes on the Psychology of Pierre Janet*”, Boston, Harvard Business School, 1948.
この著書に関しては、2015年2月に出版社の「Routledge Revivals」より、復刻版が出版されている。本原稿では、この復刻版を利用している。ただし、タイトルが変更されて、『*The Psychology of Pierre Janet*』となっている。
- 6) *Ibid.*, p. vii.
- 7) メイヨーはアメリカにおいて、「フィラデルフィアにおける最初の研究」「ホーソン実験」「東部金属工業における欠勤の研究」「南カリフォルニアの航空機工業における欠勤と労働移動の研究」の4つの産業調査を実施している。ただし、この産業調査は、労働者に関する「労働移動」や「労働意欲」などが中心である。

4つの産業調査の中で最も有名な調査は「ホーソン実験」であり、メイヨーが「ホーソン実験」を行ったことに間違いはないが、この実験の中心人物は、レスリスパーガーとディクソンである。

詳しくは、以下を参考にして欲しい。

桜井信行著『新版人間関係と経営者』経林書房、1971年。

進藤勝美著『ホーソン・リサーチと人間関係論』産業能率短期大学出版部、1978年。

Trahair, Richard. C. S., “*The Humanist Temper: The Life and Work of Elton Mayo*”, Transaction, Inc., 1984.

F. J. Roethlisberger and William. J. Dickson, “*Management and the Worker*”, New York: John Wiley & Sons, 1939.

- 8) 「こころの病」という表現を使っているが、「こころの病」も当然であるが、「精神病理学」の一部であることには間違いはない。「精神病理学」ということばでは、医学的に感じることばであり、職場における人間問題として利用されていることばとしての理解は難しいと筆者は感じていた。そこで、本稿では、「精神病理学」ということばでなく、「こころの病」ということばを使っている。
- 9) 厚生労働省の「知ることからはじめよう みんなのメンタルヘルス」の総合サイトである、<http://www.mhlw.go.jp/kokoro/first/first01.html>を参考している。
- 10) Mayo, G. E., “*Some Notes on the Psychology of Pierre Janet*”, pp. 3-23.
- 11) *Ibid.*, pp. 24-46.
- 12) *Ibid.*, pp. 47-65.
- 13) *Ibid.*, pp. 66-84.
- 14) *Ibid.*, pp. 85-102.
- 15) *Ibid.*, pp. 103-110.
- 16) 筆者は、心理学を専攻して学んでいたわけではない。そのようなことから、整理した内容に関しては十分でないことは承知している。ただ、少しでも、メイヨーがジャネの心理学にどれほどの関心と知識を持っていたのかを理解していただくための資料となるように作成している。さらに、筆者が原文を訳したため、幼稚な表現であることは否めない。また、本来なら、原文の英文と対比させながら、原稿を書くことが普通であろう。今回は、原稿枚数の関係省略させていただいた。関心を持たれた方は、原文を読んでいただければ幸いである。
- 17) Mayo, G. E., “*Some Notes on the Psychology of Pierre Janet*”, p. 5.
- 18) *Ibid.*, p. 6.
- 19) *Ibid.*, p. 6.
- 20) *Ibid.*, pp. 6-7.
- 21) *Ibid.*, p. 14.
- 22) *Ibid.*, pp. 14-15.
- 23) *Ibid.*, p. 21.
- 24) *Ibid.*, p. 22.
- 25) *Ibid.*, pp. 22-23.
- 26) *Ibid.*, p. 23.

参考文献

木村敏著『人と人との間 精神病理学的日本論』弘文堂、1972年。